

編集後記

この号には、胃癌の経過を示す客観的な資料を揃えた症例が集められている。なかには10年にも及ぶ遠い過去のデータ迄が集められたものもある。多くの方々が経験されたことと思うが、癌だということで過去の資料を集めようと思っても、癌の場所がその当時には確実に、しかもよい条件で読み取ることができないことが少なくない。このような意味で本号の症例は、その1例1例が貴重なものと言えよう。

しかも、紙数の許す限りこのように沢山の例が集められたので、それらを総合して読者は自分なりに癌の発育についていろいろ思いをめぐらすことは興味深いことと思う。またその初回像を見ると、このような時期にも癌といわねばならないのかと思う程変化の少い例もあり、それでは今後の診断はどう進める必要があるか、また新しい診断の技法をどう開発して行かねばならないかなどの課題も生まれてくる。医学はまさに無限である。

なお本号は胃癌の発育をテーマとしているが、確かに粘膜像に変化を示すものではあるが、所謂悪性サイクルを示す症例は除外したことをおことわりします。

研究欄にはNGによる実験胃腫瘍の発育過程が示されている。今や各所で盛んに行なわれているこれらの実験的研究が、臨床と結びつき患者の幸せに結びつく日の近いことを期待する。

<芦沢 真六>

<編集> 早期胃癌研究会